

指爲鉤戟、中指爲玉柱、無名指爲潛虬、小指爲奇兵、腕爲三落、五指爲奇峯、但不知其用法云何、今里巷小兒有捉中指之戲、得非其遺意乎、これによれば、蟲けんの今却て雅に近し、古め

〔拳會角力圖會下〕太平拳

圖略○圖のごとく車座にならび五人ならば五人、拾人ならば十人居りて、誰よりよみ出すといふことを、最初にきはめをきて、いづれもみなおもふほど指を出して、其指の數ほど、目當の人よりよみ出し、二十ならば二十、また三十ならば卅めにあたる人に酒を吞す事なり、此拳にあたらざる間は、すこしも酒を吞事ならず、どふぞして、あたれかし／＼とおもふところへは、とんとあたらす、かへつて下戸の所へ度々あたる事多し、上戸も下戸もたがひにこまる間が、殊のほか可笑きものなり、扱此拳にあたる人は大に福ありといふて、崎陽にては正月の賣初、または戎講などの酒席にて、専らにする事なりとぞ、人々此拳をなして、其面白き事をこゝろみ給ふべし、勿論本拳をえらざる人にて、出來る事なれば、其席おほひに賑はひて興あるものなり、此拳一名連子拳ともいふなり、

ヒ玉拳

是も圖略○圖に出せしごとく、唐桑花梨紫檀ありとのかたき木にてコップを造り、圖のごとくすなり、本に長き紐を付、そのはしに同木にて造りたる玉を結び付、右の木酒器へ彼玉を五遍のうちに一遍すくひ入るか、又三べんの中に一へんすくひ入れるか、いづれにても最初のきはめによりて玉をすくひ込み、勝まけをあらそふ、此拳雙方かはる／＼にする事なり、尤すくひかたに吞す也、是も酒席に興ありて、はなはだ面白き拳なり、是玉をすくひ込みて、其目々の吉凶をも

盲人拳